

下田市立稲生沢中学校 開校記念誌



校章

昭和53年3月4日制定

制作者 松木寿夫

☆稲穂は地名を、粹取りは雪の雪をデザイン化したもの



稲生沢中学校校歌

作詞 鈴木 白羊子
作曲 小村 三千三

一、天城路遙か南の 橘かおる稲生沢

麓も赤く輝ける わが中学に希望あり

いざ友よ いそしみ睦みて

健康大地を往かんかな

二、仰げば峰はいや高く 流れも清き稲生沢

温泉湯の煙のびやかに わが中学に幸多し

いざ友よ いそしみ励みて

生産大地に立たんかな

三、黒潮めぐる半島の 恵みは深き稲生沢

学びの道を受けつぎて わが中学に誉れあり

いざ友よ いそしみ学びて

研鑽大地に生きんかな

【校歌をつくる心】

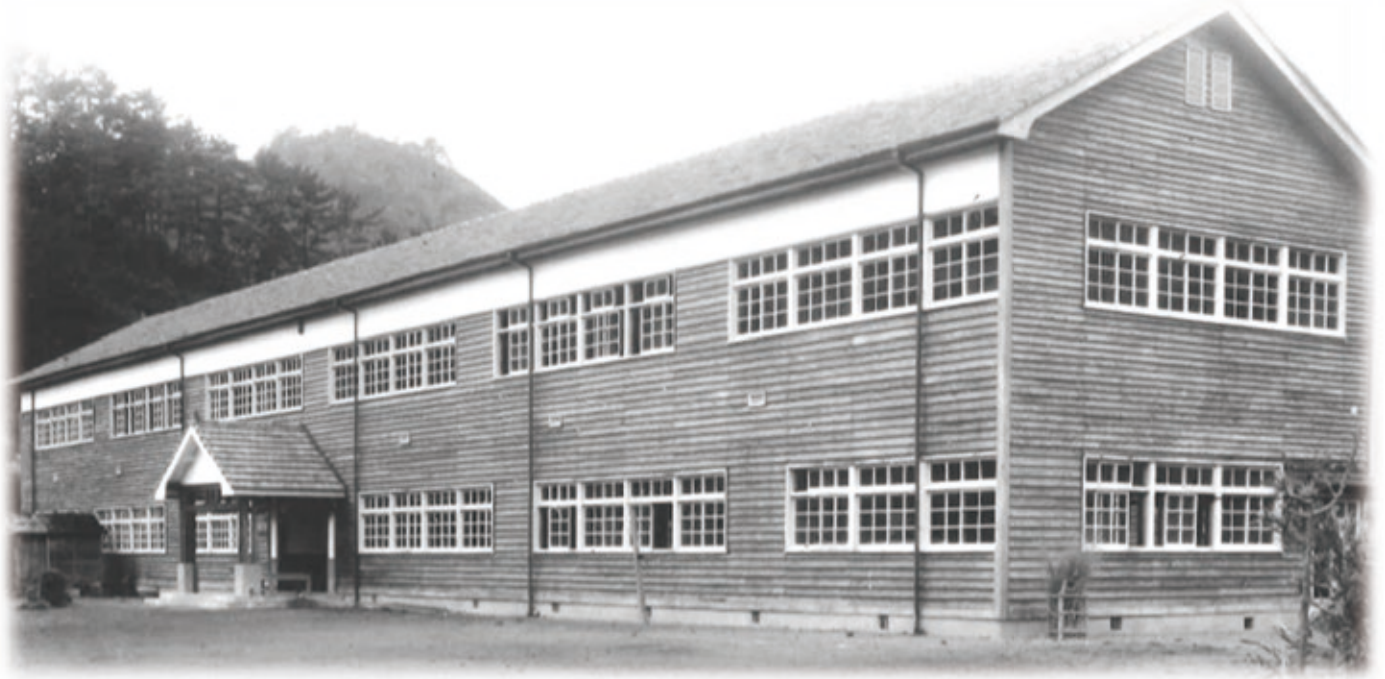
校歌の中で一節の「健康大地を往かんかな」、二節の「生産大地に立たんかな」、三節の「研鑽大地に生きんかな」の三句は職員総意で挿入した。この健康、生産、研鑽の三語は戦後焦土と化した祖国の土に新たな民族の萌芽新制中学校の生徒が育っていくのだから今は苦難に満ちていても来たるべき飛躍を…と未来への思念から特に挿入したものだ。

(藤井重太郎 初代校長の言葉)

学区の概要

校区は、伊豆の緑の山々に囲まれ、稲生沢川と蓮台寺川の流域に広がる地域である。従来は河内温泉や蓮台寺温泉郷を中心に文化を創っていたが、旧下田市のベッドタウン化に伴い、のどかな田園風景は住宅地化した。平成になると核家族化や少子化により、校区の住民の出入りも多くなり、観光産業を中心とした第三次産業従事者も多くなった。

閉校時の地区は本郷（東本郷・西本郷）、高馬、中（中、東中、西中）、立野、蓮台寺、大沢（上大沢、下大沢）、河内の7地区（支部）である。開校時から各支部活動により、地域の結束を創りだそうとPTAや健全育成の活動に取り組み、地域に信頼される学校づくりに取り組んできた。



昭和24年に落成した稲生沢村立稲生沢中学校木造校舎

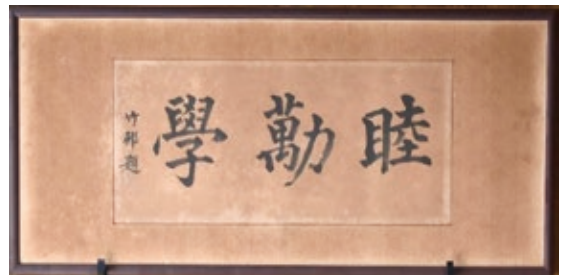
※2階建て木造校舎1棟（職員室、家事室、理科室、普通教室9室、小使室、宿直室、便所など）

【稲生沢中学校建設に至るまで】

当時学校建設に心血を注いでくれた今井武平村長（右）は「戦後の開発はまず教育」という一念を貫いた。途中で用地問題にぶつかっても障害を乗り越え遂に旅館愛染荘跡地（現在地）の買収に成功した。また、村費のかさむ建設費に苦悩していたところ江戸時代から続いた「むろやま」を処分し300万円の資金をまとめた。さらに、日露戦争の記念植林だった村有林が用材に当てられ建設された。昭和22年4月のスタートは仮校舎であり、生徒数は6学級で230人余人、教員わずか8人という小規模学校であった。



今井武平 村長



校訓「睦励学」（校長室保管）



棟上げ式（左）昭和23年11月29日
落成式（上）昭和24年5月5日

沿革

昭和22年4月1日
 稲生沢村立稲生沢中学校を創立
 稲生沢村立稲生沢小学校に併設
 昭和24年5月5日
 稲生沢村河内101番地の1に新築落成
 昭和28年6月30日
 運動場拡張工事終了
 昭和30年1月30日
 学校温泉1棟完成
 昭和30年1月31日
 町村合併により下田町立稲生沢中学校と改称
 昭和46年1月1日
 市制施行により下田市立稲生沢中学校と改称
 昭和57年3月25日
 新築校舎落成
 昭和61年3月15日
 屋内運動場完成
 平成2年4月1日
 女子制服をブレザーベスト形式に変更
 平成4年2月5日
 男子髪型規定改正（丸刈りを自由化）
 平成6年1月19日
 パソコン教室設置
 平成9年6月6日
 創立50周年記念式典挙行
 平成17年2月3日
 技術棟落成
 平成18年12月8日
 創立60周年記念式典挙行
 平成24年4月1日
 特別支援学級開設
 令和3年4月1日
 GIGAスクール構想により1人1台端末開始
 令和4年3月31日
 下田市立稲生沢中学校閉校



住 所 下田市河内101番地の1
 学校の位置 東経138度57分 北緯34度42分 海拔18メートル



昭和22年度第1回卒業生 36人

生徒数の推移

年度	生徒数	職員数	学級数	年度	生徒数	職員数	学級数	年度	生徒数	職員数	学級数	年度	生徒数	職員数	学級数
昭和22	236	11	6	41	223	12	6	60	393	18	9	16	156	15	6
23	306	13	8	42	223	13	6	61	416	21	11	17	140	15	6
24	339	13	9	43	228	12	6	62	404	22	11	18	142	15	6
25	327	13	8	44	239	12	6	63	349	19	9	19	144	16	6
26	333	13	9	45	220	12	6	平成1	335	19	10	20	134	13	5
27	281	14	8	46	223	12	6	2	319	19	9	21	112	13	4
28	301	14	8	47	228	12	6	3	291	18	8	22	104	12	3
29	322	15	8	48	248	14	7	4	255	16	8	23	108	12	3
30	356	15	8	49	271	16	8	5	222	14	6	24	121	14	5
31	326	14	7	50	266	16	8	6	215	14	6	25	127	14	6
32	291	11	6	51	287	18	9	7	209	13	6	26	131	14	6
33	258	11	6	52	305	18	9	8	206	13	6	27	131	12	5
34	231	11	6	53	310	18	9	9	194	14	6	28	122	14	6
35	244	11	6	54	303	18	9	10	191	15	6	29	118	12	6
36	280	11	6	55	302	18	9	11	174	15	6	30	99	12	5
37	296	12	7	56	314	17	9	12	173	15	6	令和1	86	12	4
38	281	12	7	57	346	17	9	13	174	13	6	2	73	12	4
39	258	11	6	58	351	18	9	14	186	12	6	3	80	12	4
40	237	12	6	59	367	18	9	15	177	14	6				

前期 昭和 22 年～昭和 57 年 木造校舎時代



開校時代の航空写真



昭和 50 年 10 月 8 日の集中豪雨により浸水した様子 (上)

昭和 49 年 5 月 9 日の伊豆半島沖地震による校内の様子 (右)



開校時代の野球部 (上)・女子バレーボール部 (下)



自慢であった温泉のある学校

学校生活の様子





大島や富士登山等の校外活動。修学旅行は東京から奈良京都へ。熱気溢れる運動会の様子。閉校まで伝統となった校舎に響き渡る合唱。仲間と切磋琢磨し、充実した三年間を過ごした学び舎。変化の激しい時代を稲生沢中学校は歩み続けてきました。



後期 昭和 58 年～令和 3 年 鉄筋校舎時代



学校生活の様子





時代ごとに白熱した運動会、完成度にこだわった合唱発表会、活躍し続けてきた部活動、テーマを追求した総合学習…、一日一日の何気ない友達との関わり合い…、稲生沢中学校の一時一時全てが、みんなの学び舎でした…。





そして、有終の美を飾った稲生沢中生

令和3年度
稲生沢中学校最後の卒業生となった現3年生(第75回卒業生)
(右)
令和4年度から 新下田中学校の最上級生となる現2年生
(右下)
最後の入学生となった現1年生(第75回入学生)(下)



稲生沢中学校 閉校にあたり

令和2年から急激に猛威を振るっている新型コロナウイルス感染症は、今(令和4年3月現在)もなお、学校生活に大きな影響を与え、生徒に「自粛と我慢」を強いて、見通しのもてない状態になっています。

閉校記念誌の編集を進めるにあたり、昭和22年の稲生沢村立稲生沢中学校の開校に至るまでの経緯と記録写真を見つめながら、戦後、食糧事情もままならなかった荒廃した社会情勢の中で、先人たちが「稲生沢の教育を守ろう」と血と汗と涙で築き上げてくれたことを感じる事ができました。

今おかれている閉塞感と予測困難な時代を過ごしている私たちは、当時とは時代が異なっていますが、どのような壁に当たっても、先人の培ってきたものを無駄にすることなく、前進する必要があるのだと改めて確認することができました。

これまでに多くの卒業生が、稲生沢中学校に通う日々の中で、授業や部活動、学校行事、給食、掃除などいろいろな教育活動を通して、仲間と同じ空間で触れ合い、稲生沢中学校でしかできない貴重な経験をしてきました。

歴史ある稲生沢中学校の核となる校訓「睦励学」(<睦>他を思う <励>求めて励む <学>自ら学ぶ)は、開校時からその時代に合った文言に変化をしながら、揺るぎない「目指す生徒像」として引き継がれてきました。

予測困難な時代となっている今こそ、未来を担う子どもたちには、いつまでも「睦励学」を胸に、稲生沢中学校の伝統と誇りをもって生きてほしいと願いながら、75年の歴史を持つ稲生沢中学校を閉校といたします。

令和4年3月31日
稲生沢中学校 校長 森本 秀樹